

仙台市文化財調査報告書第17集

# 北屋敷遺跡

六丁目コミュニティーセンター用地内調査報告

昭和54年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第17集

# 北屋敷遺跡

六丁目コミュニティーセンター用地内調査報告

昭和54年3月

仙台市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、仙台市六丁目字北屋敷所在の六丁目コミュニティセンター建設にかかる北屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の内容は、遺構確認の為の試掘調査とその後の本調査を合わせた報告である。
3. 本文の執筆担当は次のとおりである。  
工藤哲司…… I  
木村浩二…… II - 1・2、III、IV - 2(1)・3、V  
渡部弘美…… IV - 1・2 (2)・(3)・(4)
4. 本書に掲載した遺構・遺物の図面作製は木村・渡部が行い、トレースは木村が行なった。
5. 本書に掲載した写真は遺構を木村・渡部、遺物を渡部が撮影した。
6. 本書の編集には木村があたった。
7. 調査にあたっては、六丁目町内会長 遠藤兵一氏をはじめ地元の皆様にも御協力をいただいた。また、仙台市市長室相談課の坪井誠・藤井猛の両氏に協力を得た。
8. 出土遺物については、東北歴史資料館 藤沼邦彦氏の御教示を得た。

## 目 次

例 言	
I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	1
1. 自然的環境	1
2. 歴史的環境	3
III 調査の方法と経過	6
IV 調査の成果	7
1. 基本層序	7
2. 遺 構	7
(1) 掘立柱建物跡	7
(2) 井 戸 跡	9
(3) 土 壤	11
(4) 溝	11
3. 出土遺物	15
V ま と め	17

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡分布図	第6図 井戸跡実測図
第2図 調査地区位置図	第7図 土壌実測図
第3図 調査区全体測量図	第8図 土壌・溝実測図
第4図 調査区セクション図	第9図 遺物実測図
第5図 掘立柱建物跡実測図	

## 図 版 目 次

1. 調査区全景（北西より）	5. No.5 柱穴礎板
2. 1号溝、2号溝全景（西より）	6. 6号井戸跡・曲物出土状況
3. 4号・5号・6号井戸跡全景	7. 出土遺物
4. 7号井戸跡全景	

## 調査体制

- 調査期間： 昭和53年9月4日～9月6日 試掘調査  
9月11日～10月17日 本調査
- 調査主体： 仙台市教育委員会
- 調査担当： 仙台市教育委員会社会教育課文化財係
  - 試掘調査……工藤哲司・木村浩二
  - 本調査……木村浩二・渡部弘美
- 調査参加者： 阿蘇幸二・飯泉寿裕・林慶一・菊地英俊・小島正悦・遠藤良一・庄子喜平  
阿部春一・遠藤睦志・相沢清一・小金沢伸一・菅野昭彦・泉賢司・飯塚正志  
中沢岳彦・中鉢克朗・穴沢和弥・笹川嘉久・佐藤正道・松浦昌文・松本壽満
- 調査協力： 仙台市市長室相談課  
六丁目町内会（会長 遠藤兵一）  
山口武太郎  
株式会社 萩野工務店

## I . 調査に至る経過

仙台市は、地域整備計画の一環として、昭和49年度より、地域住民が管理運営するコミュニティ・センターの建設事業を行ってきたが、昭和53年度事業として、六丁目地区コミュニティ・センターの建設が計画された。しかし、建設予定地は、仙台市の文化財分布図に（C-168）として登録されている北屋敷遺跡に隣接しており、遺構の存在も考えられたので、仙台市内部の関係部局での協議により、事前に予定地内の試掘調査を行い、その結果により処置することが決った。

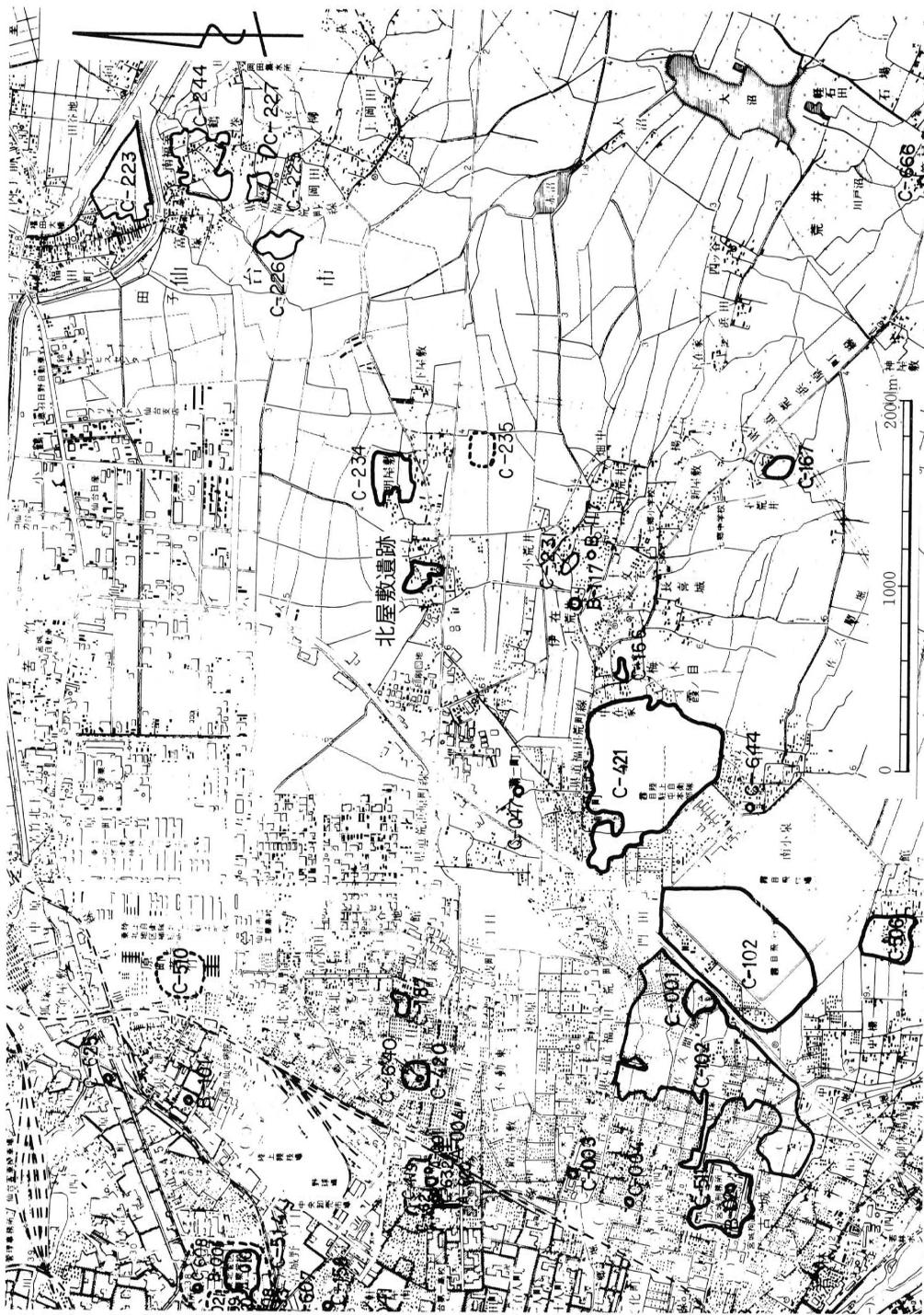
これに基づいて、仙台市教育委員会社会教育課、文化財係が地元の協力を得て、9月4日から9月6日まで、試掘調査を行ったところ、多数のピットと溝・土壙が存在することが明らかになった。このため、ふたたび関係部局が、建設予定地の変更を含む協議を行ったが、予定地は六丁目地域の地主有志が、コミュニティ・センター建設のために提供した土地であるため、予定地の変更はできないということになり、建設予定地内全域の事前記録保存調査を引き続き実施することになった。また、試掘調査の結果によって、北屋敷遺跡の範囲は、東南方向へ拡大することが明らかになっていたので、分布図の修正を行なった。

## II . 位置と環境

### I . 自然的環境

北屋敷遺跡は、仙台市の東部、東北本線、仙台駅より東約5kmのバイパス六丁目交差点より東約1km、仙台市六丁目字北屋敷にある。仙台市は市街化した段丘とその東に広がる沖積平野からなっていて、北屋敷遺跡は、北東部を東南流する七北田川と南西部を東南流する広瀬川の間に広がる沖積平野上海抜5m内外の微高地に立地し、海岸線までは直線距離にして5.3kmである。遺跡は県道荒浜原町線から県道福田荒町線が北東に分岐していく地点の北側にあり、以前は耕作地が一面に広がっていたが、近年、開発が急速に進み、付近は工業団地の建設や宅地化に伴い現状はめまぐるしく変化しつつある。

第一図 遺跡分布図



表Ⅰ. 周辺遺跡一覧表

遺 跡 番 号	遺 跡 名	出 土 遺 物
C - 001	遠 見 墳 古 墳	土師器・粘土櫛
C - 047	曾 利 松 明 神 古 墳	
C - 102	南 小 泉 遺 跡	弥生土器・土師器・須恵器・石製品
C - 166	中 在 家 遺 跡	土 師 器
C - 167	下 荒 井 遺 跡	土師器・須恵器
C - 187	志 波 遺 跡	瓦・土師器
C - 223	福 田 町 遺 跡	土師器・須恵器
C - 224	鶴 卷 I 遺 跡	土 師 器
C - 225	鶴 卷 II 遺 跡	土 師 器
C - 226	田 子 遺 跡	土 師 器
C - 227	小 原 遺 跡	土 師 器
C - 231	押 口 遺 跡	土 師 器
C - 234	明 屋 敷 遺 跡	土師器・須恵器
C - 235	地 藏 浦 遺 跡	中世陶器
C - 419	陸 奥 国 分 寺 跡	瓦・土師器・須恵器
C - 420	陸 奥 国 分 尼 寺 跡	瓦・土師器・須恵器
C - 421	仙 台 東 郊 条 里 跡	
C - 510	南 目 城 跡	

仙台市教育委員会「仙台の文化財分布図」

## 2. 歴史的環境

霞ノ目から六丁目などの原町東部地区とよばれる仙台市東郊の地区には、現在、工業団地化および宅地化が急速に進行しつつあるが、その以前から、七北田川の自然堤防および海拔3～6mの沖積平野の微高地を中心にいくつかの集落が点在している。

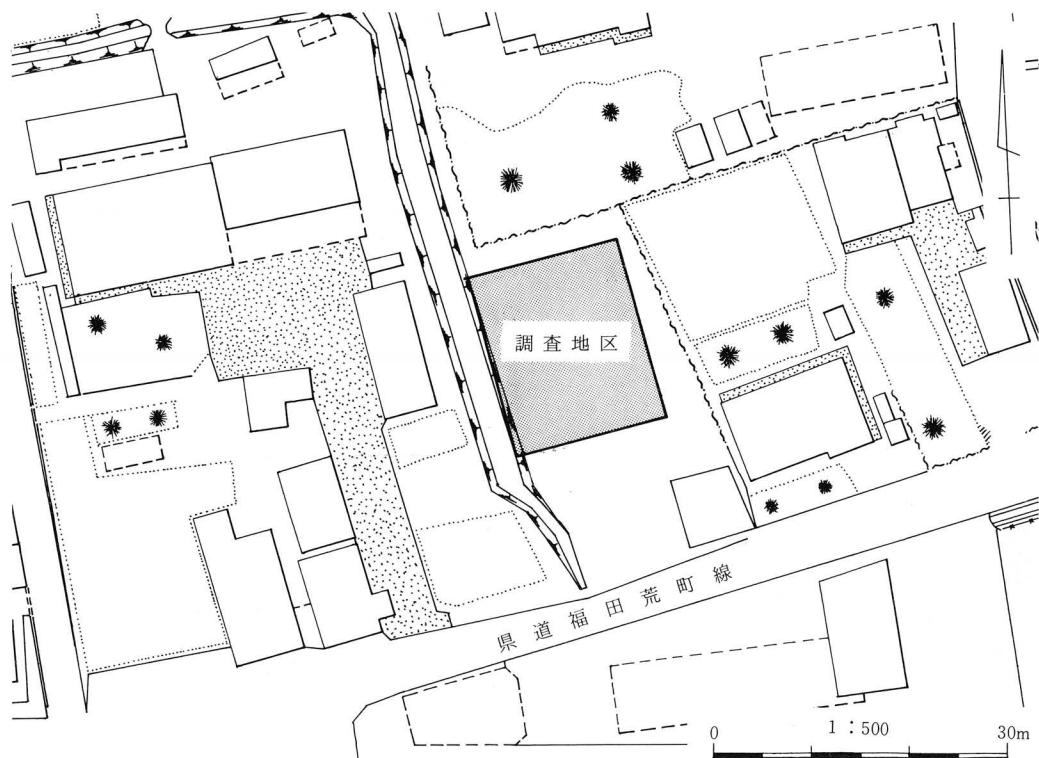
昭和50年以降の分布調査によって、六丁目、田子地区にかけて数ヶ所の遺跡が追加発見されたが綿密な分布調査が十分に実施されていないこともあり、現在の時点では遺跡の分布が濃密な地域とはいひ難いが、今後の調査によってあらたに発見される可能性も十分に考えられよう。

本遺跡（C-168）に隣接して、東0.3kmには、土師器、須恵器が散布する明屋敷遺跡（C-234）があり、南南東0.5kmには、中世陶器が出土する地蔵浦遺跡（C-235）がある。また、北東

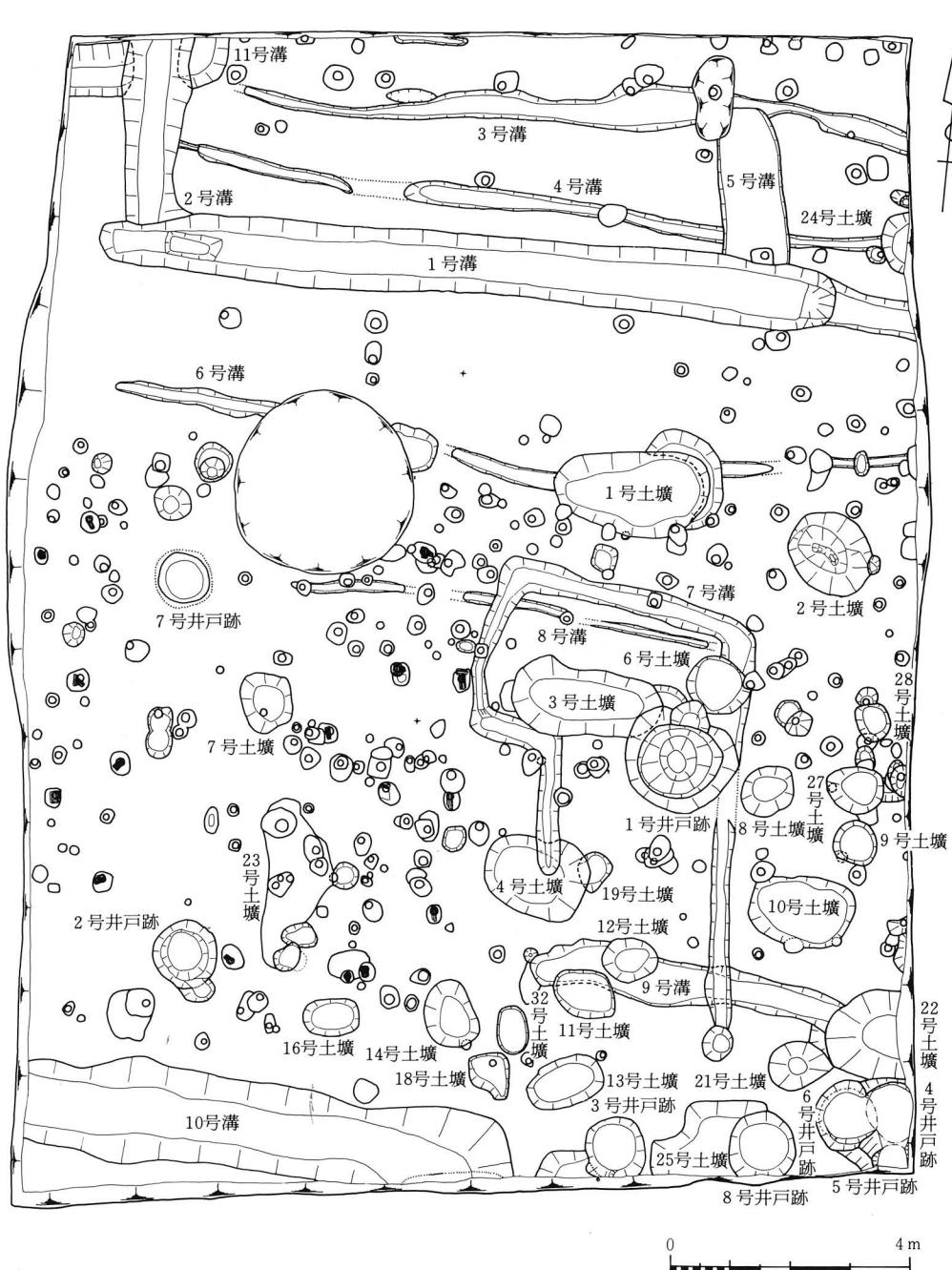
1.8~2.8km程の地域には、土師器・須恵器が出土する福田町遺跡（C-223）、土師器が出土する鶴巻I遺跡（C-224）、鶴巻II遺跡（C-225）、田子遺跡（C-226）、小原遺跡（C-227）がある。

南、0.7kmには、土師器が出土する押口遺跡（C-231）があり、南南西、1.1kmには、同じく土師器が出土する中在家遺跡（C-166）がある。南南東、1.8kmには土師器・須恵器が出土する下荒井遺跡（C-167）がある。また、南西部1.1~1.9kmには条里跡が確認されており、さらに南西2.0~3.5kmには、弥生時代から古墳時代さらには奈良・平安時代まで続く南小泉遺跡（C-102）があり、その中には東北地方で、第3位の規模をほこる主軸長110mを計る前方後円墳、遠見塚古墳（C-001）がある。西南西1.3kmには、曾利松明神古墳（C-047）がある。東方2.3kmには、土師器・瓦が出土する志波遺跡（C-187）、2.7kmには陸奥国分尼寺跡、3.2kmには、陸奥国分寺跡がある。

南小泉地区を含めない原町東部地区とよばれるこの地域における集落の形成などの始源は、遺跡を概観すれば、ほぼ奈良時代頃と考えられ、立地区域も現在の集落とほぼ一致しているようである。

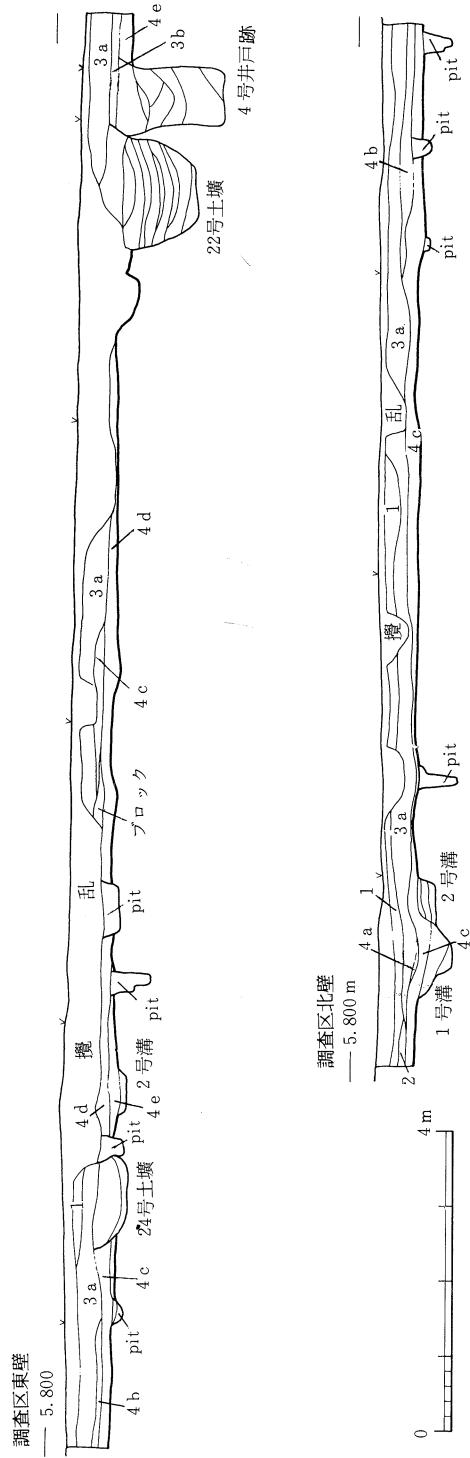


第2図 調査地区位置図



第3図 調査区全体測量図

### III. 調査の方法と経過



第4図 調査区セクション図

コミュニティセンター敷地は県道福田荒町線から北に14mより入ったところに南北19m、東西15.5m、294.5m<sup>2</sup>の範囲であるが、建設用地は遺構の東側外であることから、遺構の有無を確認するため敷地内に東西15m、南北4mの2つのトレンチを設定し、表土および土盛した土をユンボで排土した。深さ70cm程で明黄褐色砂質土(第5層)を検出し、この第5層上面精査の結果、北トレンチで暗褐色土・黒褐色土を埋土とする溝・土壙および柱穴と考えられる多数のピットを検出、南トレンチで同様な溝・土壙・ピットの他、井戸跡と考えられる円形の落ち込みを検出した。その結果、遺構が敷地内全面に広がっているものと判断し、南北トレンチ間幅8×15mと南トレンチの南側幅3×15mの部分の表土・盛り土をユンボで排土し、調査区域を敷地内のほぼ全面に広げた。西側1m程の部分は最近まで水をたたえた堀にかかっていた為、遺構はないものとみて、調査区域から除外した。排土後の精査の結果、調査区内のほぼ全面に遺構が密集しており、特に中央部には掘立柱穴・土壙・溝が重複して濃密に検出され、さらに南半には土壙・井戸跡が多数検出された。

層位	土色	土質	備考
1	明褐色	シルト	炭化物を含む
2	明灰色	シルト	炭化物を含む 橙色土混入
3 a	暗茶褐色	シルト	炭化物を多量に含む
3 b	暗茶褐色	シルト	炭化物を含む
4 a	褐色	シルト	炭化物を含む 酸化鉄を含む
4 b	褐色	シルト	炭化物を含む
4 c	褐色	シルト	炭化物を含む
4 d	褐色	シルト	炭化物を含む 灰を含む
4 e	褐色	シルト	炭化物を含む 茶褐色土混入
5	明黄褐色	(地山)	

## IV. 調査の成果

### I. 基本層序

北屋敷遺跡における基本層序は、大別して5層に分けられ、細別すると10層まで確認された。従来の表土層は削平、盛り土により存在しない。

第1層は明褐色シルト層で炭化物を若干含む層である。第2層はトレント北壁西側にみられるのみであるが、明灰色のシルト層である。第3層は暗茶褐色土シルト層で、二層に分ける事が出来る。3a層は多量に炭化物を含んでいる。3b層では土壤の掘り込み面が確認されている。第4層は若干の混入物・混入土により、五層に細分することが出来るが、土色は全般にわたって褐色土であり、シルト質である。同層中より、井戸・土壤・ピットの掘り込み面が確認された。第5層は明黄褐色土で、地山面である。大半の遺構はこの面で確認されている。

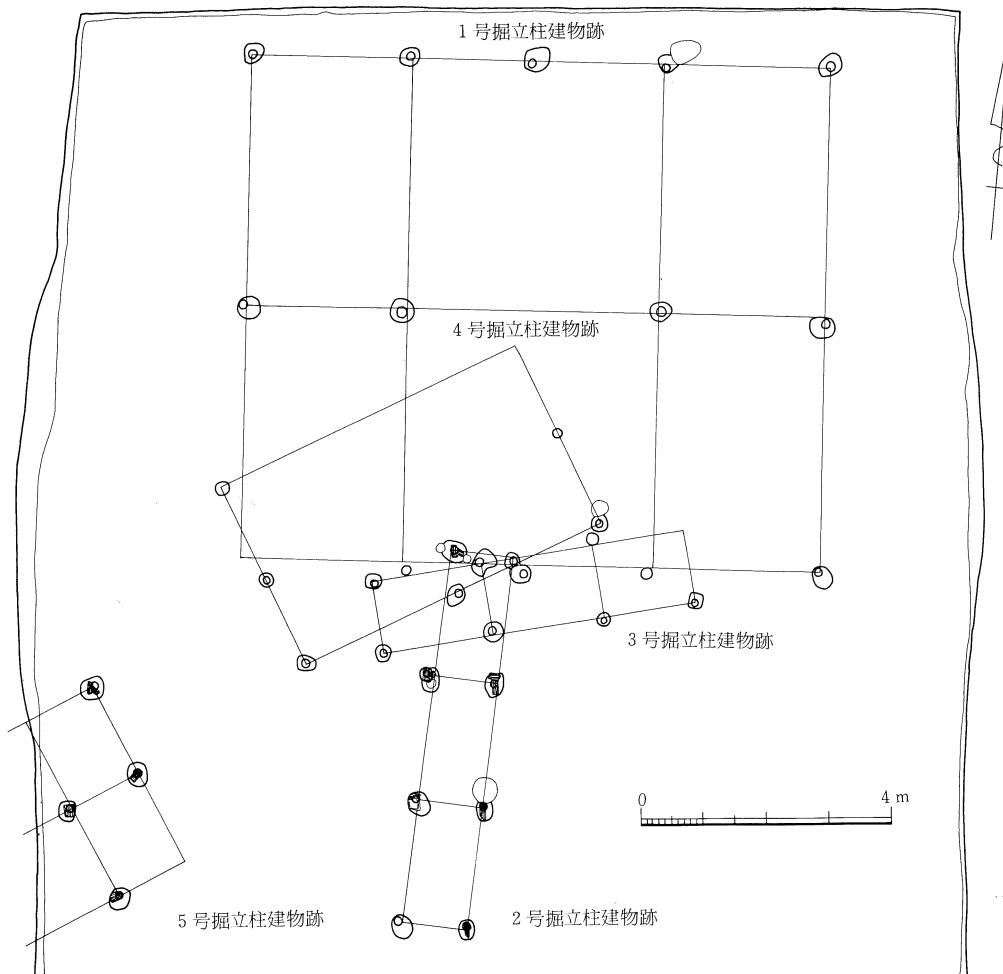
### 2. 遺構

#### (1) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 梁間2間、桁行4間の東西棟建物跡である。梁間は約8mで柱間寸法は4+4mの等間、桁行は約9mで、2.5+2+2+2.5mと両端が広い不等間である。建物跡の方向は北側柱列の柱痕跡を基にすると東で北に4°偏している。柱穴は30×40cm程の不整方形で、ほぼ垂直に掘られており、埋土は暗褐色土である。柱痕跡は直径14~16cmの円形で、深さは深いもので57~58cm、浅いもので10~14cmを計る。建物跡の中央にあたる南2東3の位置には柱穴、柱痕跡とも検出されず、南1東2の位置では柱痕跡のみが検出された。南西の隅柱は削平され検出されなかった。

2号掘立柱建物跡 梁間1間、桁行3間の南北棟建物跡である。梁間1.05m(3.5尺)桁行は6m(20尺)で柱間寸法は2m等間である。建物跡の方向は東側柱列の柱痕跡を基にすると北で東に2°偏している。柱穴は30×40cmの不整円形で、ほぼ垂直に掘られており、埋土は暗褐色土である。柱痕跡は直径10~12cmの円形で深さは30~40cmである。南西隅柱と北東隅柱を除く6つの柱穴からは各々1~2枚の礎板と考えられる板材や板石が検出された。

3号掘立柱建物跡 梁間1間、桁行3間の東西棟建物跡である。梁間1.2m(4尺)桁行は4mで柱間寸法は西から1.7+1.8+1.5mと不等間である。建物跡の方向は南側柱列の柱



第5図 掘立柱建物跡実測図

痕跡を基にすると東で北に15°偏している。柱穴は直径20~30cmの不整円形および方形で不揃い、埋土は暗褐色土である。柱痕跡は直径10~12cmの円形で深さは10cm未満のものから60cmをこえるものまである。北東の隅柱は1号土壤との重複の為、不明であり、北1東2柱穴では柱痕跡が検出されなかった。

**4号掘立柱建物跡** 梁間2間、桁行2間の東西棟建物跡である。梁間3m(10尺)で柱間寸法は1.5m等間、桁行は5.15mで柱間寸法は西から2.65+2.5mと不等間である。建物跡の方向は南側柱列の柱痕跡を基にすると東で北に31°偏している。柱穴は直径20cm程の円形や20×30cm程の不整方形で、埋土は暗褐色土である。柱痕跡は直径10~14cmの円形で深さは10~40cmである。北東の隅柱は検出されず、北1東2の柱穴は攪乱により不明である。

**5号掘立柱建物跡** 梁間2間、桁行2間以上の東西棟建物跡で、西側は調査区外である。

梁間約3.10mで北側の柱間寸法は1.50m(5尺)である。桁行東側1間の柱間寸法は1.20m(4尺)である。柱穴は30~40cm程の不整方形で埋土は暗褐色土である。柱痕跡は直径12~14cmの円形で深さは25~45cmである。南東の隅柱は検出されなかったが、4つ柱穴には礎板と考えられる板材が検出された。

## (2) 井戸跡

調査区南側に計8基の井戸跡を確認した。特に、トレンチ南壁際に密集してみられ、3基の井戸跡が切り合っているものもみられる。

形態(平面形・断面形・深さ)から三種類〈A:平面は円形で、断面は逆台形〉・〈B:平面は円形で、断面は長方形、深さは1mをこえる〉・〈C:平面は円形で、断面はU字型を呈し、平面径と深さがあまり変わらない〉が認められた。

井戸跡は、1号井戸を除いて、全て素掘りの井戸と考えられる。井戸枠等の内部施設のあるものは一基も認められなかった。

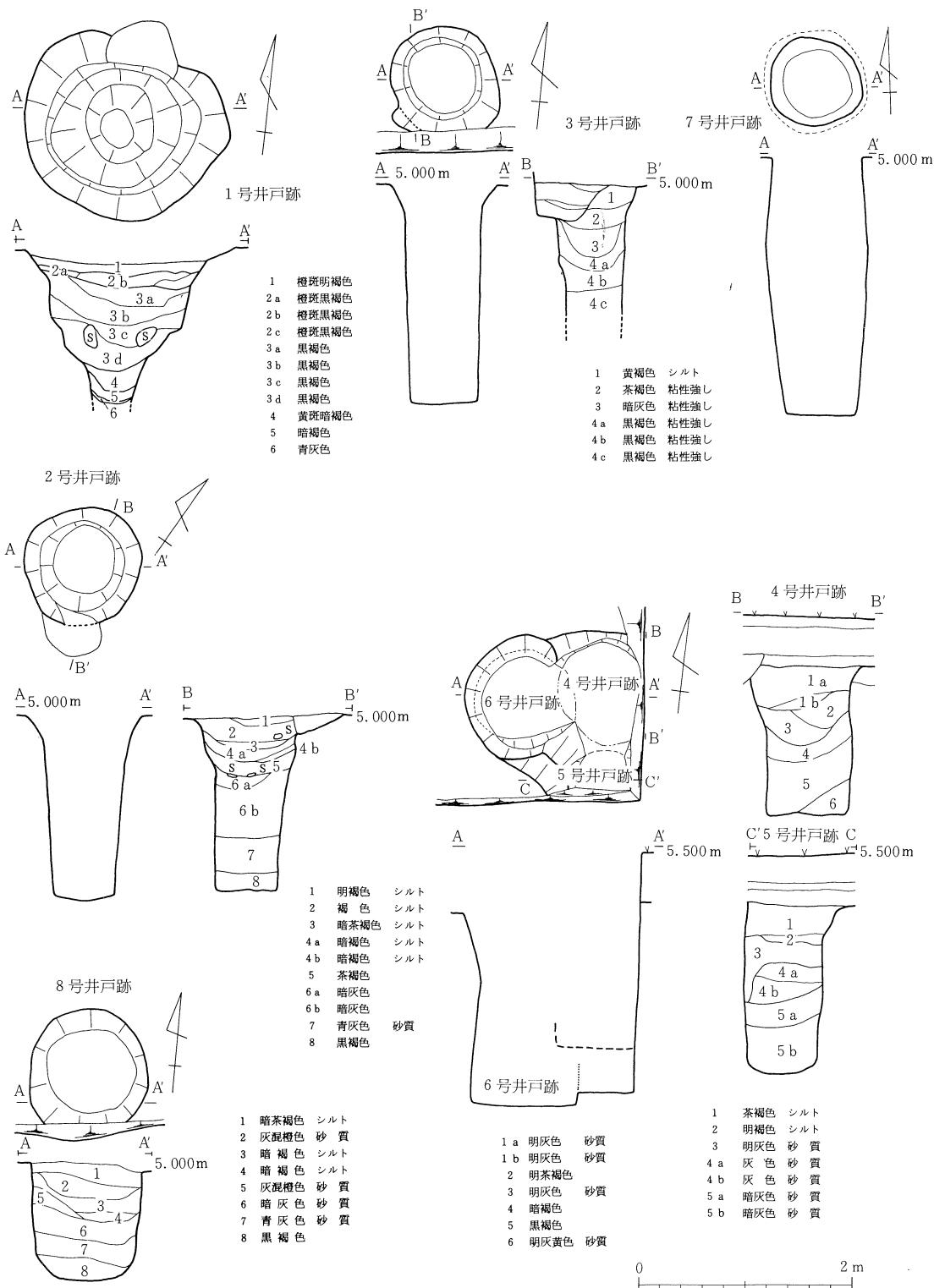
遺物としては、土師器・陶磁器・擂鉢・木製品と多種出土している。

1号井戸跡・A 調査区東側に位置し、地山面上で検出された。平面形は約193×164cmを計り、ほぼ円形である。断面形は逆台形を呈し、深さは、調査の関係上、約160cmまで確認した。埋土は6層確認され、自然堆積である。埋土上層部より、土師器片・磁器片・鉄製品・骨片が出土している。形態等から、井戸枠の使用が考えられたが、内部からは何も検出されなく枠組については不明である。

表2. 井戸跡一覧表

	平面形	断面形	大きさ	深さ	出土遺物・他
1号井戸	円形	逆台形	193×164	160以上	土師器片・磁器・鉄製品・骨片 3号・30号土壙・7号溝を切っている
2号井戸	円形	長方形	116×110	174	土師器片・古瓦片
3号井戸	円形	長方形	112×111	206	陶器・磁器・木製品 33号土壙に切られている
4号井戸	円形	長方形	不明	141	5・6号井戸と切り合っている
5号井戸	円形	長方形	不明	160	4・6号井戸と切り合っている
6号井戸	円形	長方形	120×?	182	曲物・擂鉢・墓石 4・5号井戸と切り合っている
7号井戸	円形	長方形	90×83	244	土師器片・木器(椀)・木製品 陶器(古瀬戸・美濃?・天目?)
8号井戸	円形	長方形	119×114	110	擂鉢片 25号土壙を切っている

(単位:cm)



第6図 井戸跡実測図

**7号井戸跡・B** 調査区中央西側に位置し、地山面で検出した。平面形は約90×83cmを計り、円形である。断面形は長方形を呈し、深さは約244cmを計り、井戸跡8基中もっとも深さのあるものである。形態等から、素掘りの井戸と考えられる。埋土下層部より、陶器片（吉瀬戸・美濃？・天目？）が出土し、上層部から土師器片・木器椀・木製品が出土している。

**8号井戸跡・C** 調査区南壁東側に位置し、地山面で検出した。平面形は約119×114cmを計り、円形である。断面形はU字型を呈し、他の井戸に比べて底面が丸みをおびている。深さは約110cmを計り、比較的浅いものである。埋土は8層みられ下層部より擂鉢片が出土している。

### (3) 土 壤

調査区全域に計33基の土壤が分布している。特に、トレンチ中央部から南側にかけては密集した状態でみられた。大きさから二種類に分けられるが、いづれも、関連遺構・出土遺物が皆無に近く、性格は不明である。遺物は、6・13・23・25土壤から、わずかにみられるのみで、土師器片・須恵器片・古瓦片が出土している。

**1号土壤** 調査区中央東側に位置する。平面形は長円形で、約260×140cmを計る。断面形は舟底形で、深さ約38cmを計る。6号溝・29号土壤と重複しており、両遺構を切っている。堆積層は5層みとめられ、自然堆積層である。遺物は認められなかった。

**13号土壤** 調査区南側中央に位置する。平面形は約130×80cmの長円形を呈し、断面形は逆台形であり、深さは約27cmを計る。遺物は底面上より、土師器片・古瓦片が出土している。

**23号土壤** 調査区南側の西に位置する。平面形は、約285×111cmの不整形を呈し、深さも5cm程である。遺物として、土師器片・炭化物が多量に出土したが、性格は不明である。

### (4) 溝

調査区内において、11条の溝を確認した。他の遺構とは重複関係があることなどから、関連はうすいと考えられ、単独に存在するものか、調査区外のものに関連するものと考えられる。

溝の形として、直線的にのびるもの、直線的にのび屈曲するもの、コの字状に囲みをもつものなどがみられる。

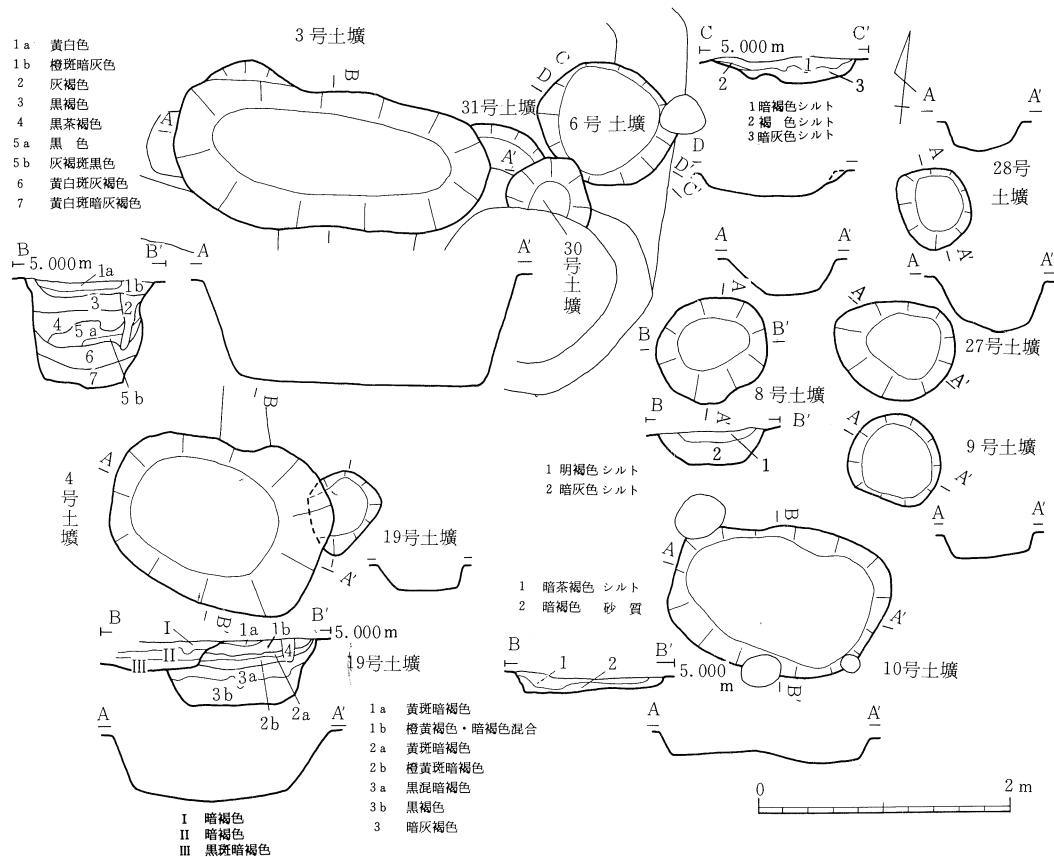
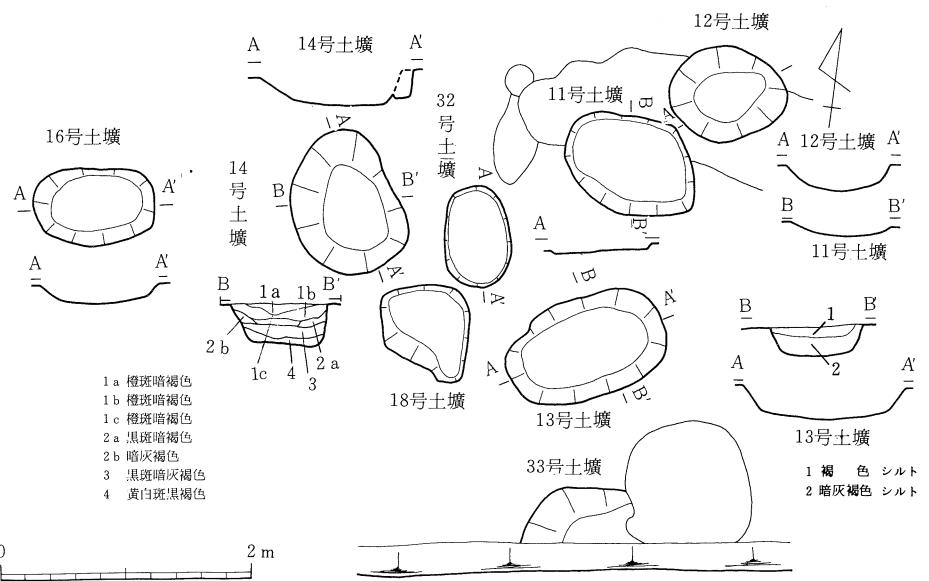
遺物は、土師器・陶器・擂鉢・燈明皿・硯・近世瓦等が出土している。多種にわたる遺物が出土することにより、溝相互間には時間的な差が存在するものと考えられる。

**1号溝** 調査区北側に位置し、東西方向に、長さ12.6m・幅1m・深さ60cmをもって、直線的にのびている。2号溝が1号溝東西端部と重複し合い折重さなってみられ、5号溝が東北端部で切られている。1号溝と関連するものは確認されなかった。遺物として、土師器片・陶器片・燈明皿・硯・近世瓦片が出土している。

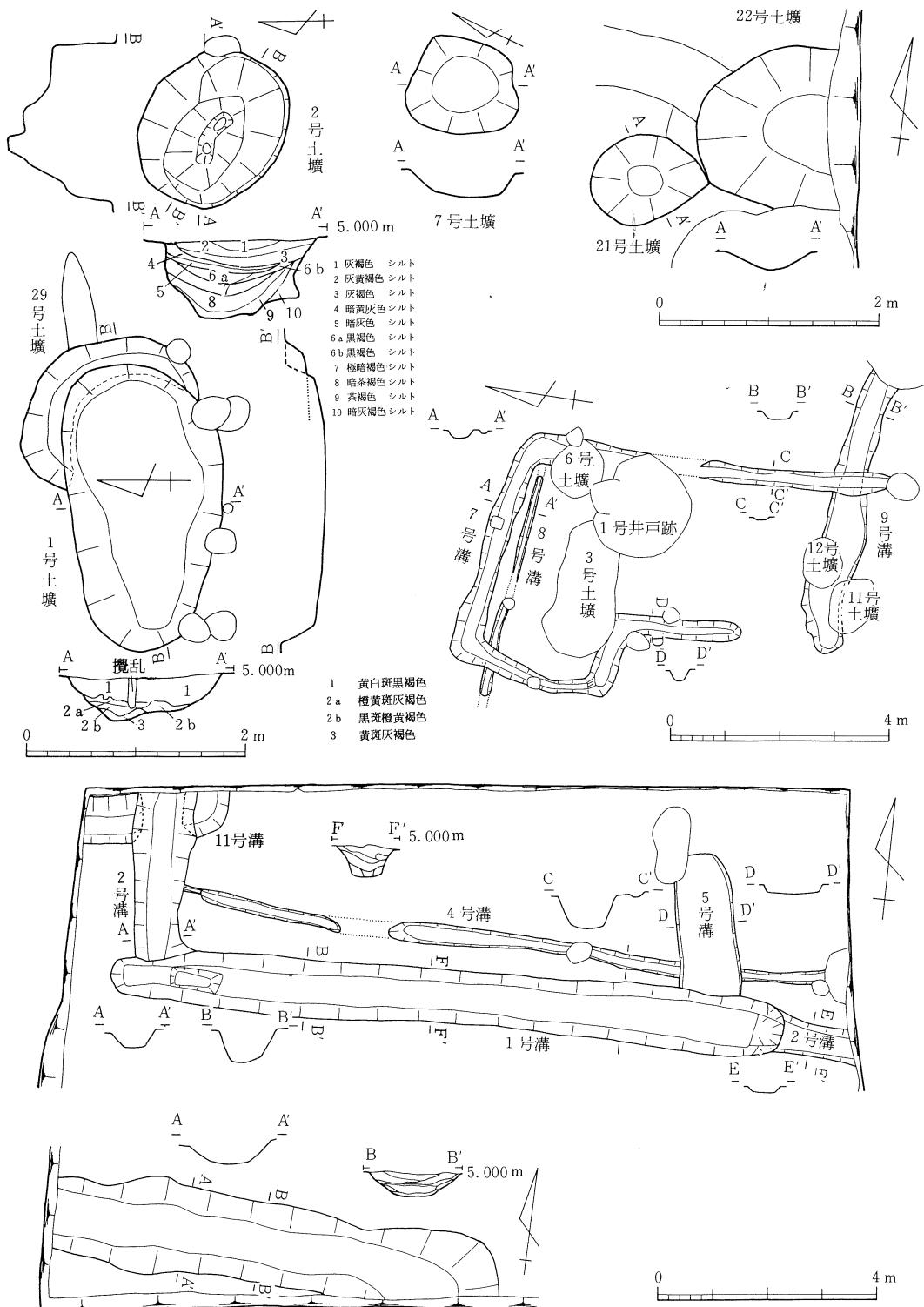
表3. 土壙一覧表

	平面形	断面形	大きさ	深さ	出土遺物・他
1号	長円形	舟底形	260×140	38	6号溝・29号土壙を切っている
2号	楕円形	不整形	154×126	101	
3号	長円形	逆台形	252×106	88	7号溝を切っている
4号	不整方形	逆台形	174×131	56	7号溝に切られている 19号土壙を切っている
5号	不整方形	?	不明	—	
6号	円形	舟底形	102×91	19	土師器片・7号溝を切っている
7号	不整方形	逆台形	100×90	26	
8号	楕円形	逆台形	94×82	28	
9号	円形	逆台形	76×74	21	
10号	不整円形	逆台形	167×120	25	
11号	不整方形	舟底形	116×82	12	9号溝を切っている
12号	楕円形	舟底形	94×76	20	9号溝を切っている
13号	長円形	逆台形	130×80	27	土師器片・古瓦片
14号	長円形	逆台形	115×85	27	
15号	不整方形	逆台形	71×49	4	
16号	不整方形	舟底形	96×62	15	
17号	不整方形	舟底形	84×79	10	
18号	不整方形	逆台形	76×70	7	
19号	不整方形	逆台形	?×53	21	
20号	円形	舟底形	65×59	9	
21号	楕円形	舟底形	110×80	18	
22号	長円形?	舟底形	不明	—	
23号	不整形	不整形	285×111	5	土師器片・炭化物
24号	円形?	?	不明	—	
25号	不整方形	?	不明	—	須恵器片・8号井戸に切られている
26号	円形?	?	不明	—	10号溝を切っている
27号	楕円形	舟底形	98×79	44	
28号	不整方形	舟底形	62×56	23	
29号	円形?	?	173×?	—	
30号	円形?	?	70×?	—	6号土壙を切っている
31号	円形?	不明	不明	—	
32号	長円形	逆台形	81×54	8	
33号	方形?	?	不明	—	3号井戸を切っている

(単位: cm)



第7図 土 壤 実 測 図



第8図 土壌・溝実測図

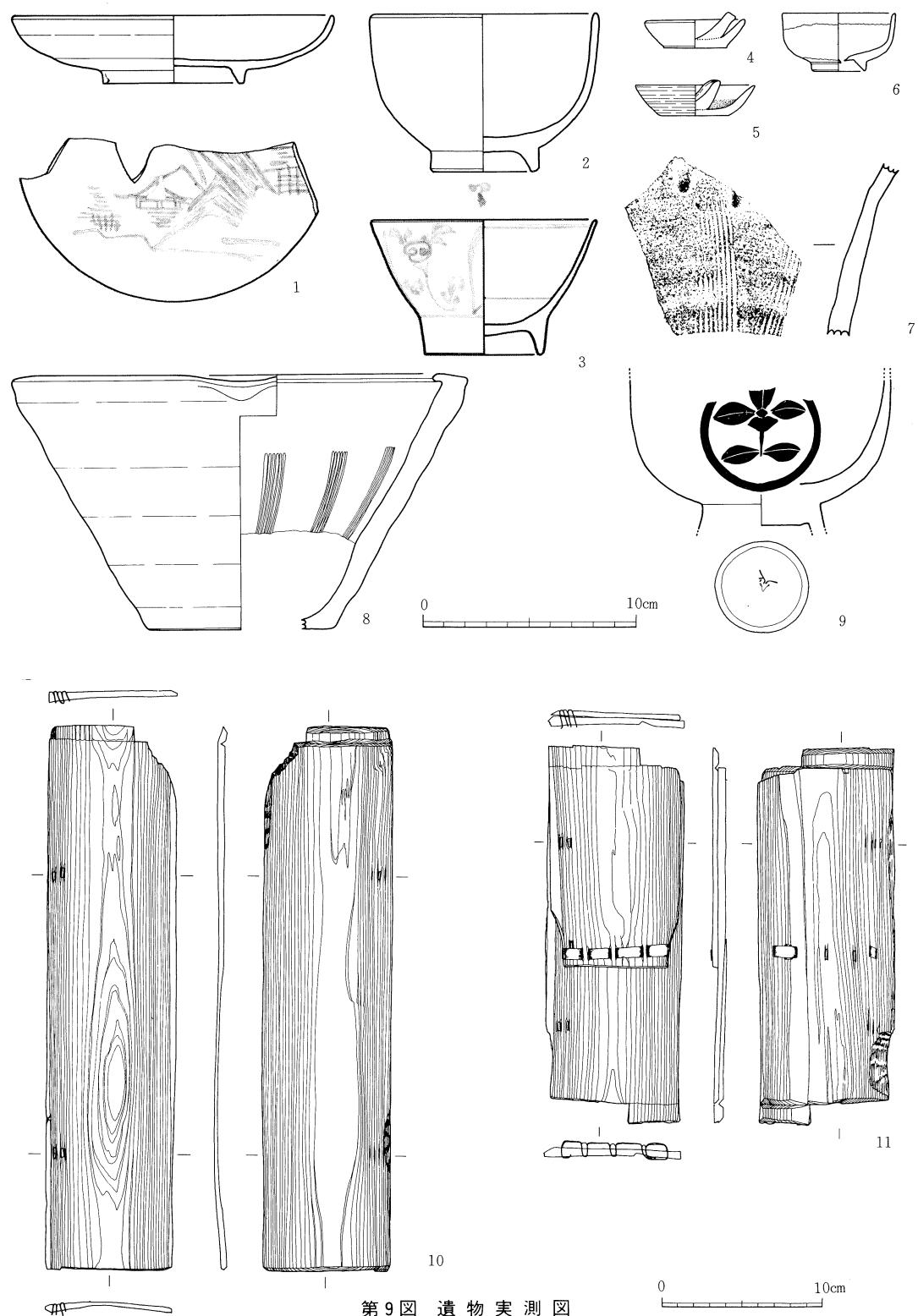
**7号溝** 調査区中央東側に位置する。幅20cm・深さ10cm程のもので、1号井戸跡、3号土壙等を囲むかのように配置しているが、いずれも重複関係があり切られているので関連はないと考えられる。遺物は出土しなかった。

### 3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は平安時代以降のものと考えられる土師器・須恵器から明治時代のものと考えられる陶器・擂鉢まで年代的にみれば広範囲にわたっている。

1号溝からはロクロ使用の土師器片が若干、他には江戸末期から明治初期のものと考えられる遺物が大半を占めている。灰緑色を呈し、復元口径15.1cmを計る絵皿（第9図1、図版7-6）、青白色を呈し、復元口径10.6cm、高さ6.4cmを計る茶碗（同図3）、灰白色釉がかかり口径5.3cm、高さ2.8cmを計る盃（同図6、図版7-3）で、底部には成形の段階であったと考えられる小孔があるもの、他に伊万里焼片1点を含む陶器類、また口径4.8cm、高さ1.7cmを計る素焼きの燈明皿（同図4、図版7-2）、口径5.6cm、高さ1.7cmを計る素焼きの燈明皿（同図5、図版7-1）で、いづれも内面中央から斜めに立ちあがる芯台を有し、芯台先端および内面には「すす」が付着している。その他には江戸末期から明治初期のものと考えられる砥石・擂鉢・硯・瓦片・土鈴（図版7-4）などがある。

2号井戸跡からは土師器細片2点とともに古代のものと考えられる平瓦が1点出土しており、3号井戸跡からはほぞ穴のある木製品（図版7-11）と陶器片が出土している。6号井戸からは復元口径約20cm、高さ9cmの曲物1点、復元口径21.4cm、高さ12cmの擂鉢片1点（第9図8、図版7-8）と「天明四年」銘のある墓石1点（図版7-9）が出土している。7号井戸跡からは明灰褐色を呈し、口径10.8cm、高さ7.5cmを計る美濃焼と考えられる茶碗1点（第9図2）古瀬戸片1点、天目に類似した鉄釉の破片2点を含む陶器片若干の他、ロクロ土師器片も若干出土している。さらに復元口径12.3cm、現存高6.9cmを計る漆塗りの木製椀（同図9、図版7-7）がある。椀の外面には等間隔に3つの「丸に橘」とみられる家紋が描いてある。また、桜皮とめのある杉板が3枚している。1枚は長さ23.6cm、幅8.4cm、厚さ5mmと3mmの板を2枚重ねているもので両方の木口から1.3cm程の部位の内側に幅5mm程のV字状の刻み溝が入っている（同図11、図版7-12）。2枚目は長さ34cm、幅8cm、厚さ4mmの同じく杉板で一方の木口から1cmの部位の内側に幅3~4mmの同様な溝が切ってある（同図10、図版7-13）。もう一方にも同様の溝があったと考えられるが、溝部分から欠損している。3枚目は2枚目のものとほぼ同様の大きさの杉板で、木口は両端とも溝部分から欠損している（図版7-14）。ま



第9図 遺物実測図

た絵馬の破片とみられる墨書・朱書のある板材が数点出土している。8号井戸跡からは江戸末期から明治初期頃のものと考えられる擂鉢片（第9図7）が出土している。

その他には3号溝から土師器片少々、5号溝から土師器・須恵器片少々、6号・13号・23号土壙から土師器片少々、25号土壙から須恵器片1点、ピット内から古代のものと考えられる布目の丸瓦片1点、表採遺物として土師器片、須恵器片の他、中世陶器片2点、攪乱土層内より、「寶曆十年」銘のある墓石1個がある（図版7-10）。

## V. まとめ

今回の調査区は当初北屋敷遺跡の隣接地であったが、試掘調査の結果、井戸・溝・土壙・柱穴等多数の遺構が検出された為、この地域も北屋敷遺跡の一部と考え、コミュニティセンター建設予定地全域を発掘調査するに至った。

今回 調査の面積は東西15m余、南北20m弱の300m<sup>2</sup>程であるが、検出遺構は掘立柱建物跡5棟を含む柱穴が約300、井戸跡8基、土壙33基、溝11条を数えた。これら遺構からの出土遺物は井戸跡より出土の木製品をのぞけば、平箱1箱にも満たない土器・陶器類などで、古代のものと考えられる土師器・須恵器・瓦片は少量で、江戸時代末期から明治時代初期の頃のものが主体を占めている。この地には太子堂とよばれる小祠があり、これに供献されていたと考えられる遺物も散見される。

これらのことなどから、遺跡の年代は古代までさかのぼって考えられるが、今回検出された遺構はむしろ出土遺物が主体を占める江戸末期から明治初期のものと考えるのが妥当であろう。しかし、わずかではあるが、土師器・須恵器・瓦など古代のものと考えられる遺物や中世の陶器、さらには古瀬戸・伊万里などの破片もみられることから、この地域の歴史を考えるうえで、貴重な資料となるだろう。今後の調査研究や類例の増加を待って検討して行きたい。



1. 調査区全景（北西より）



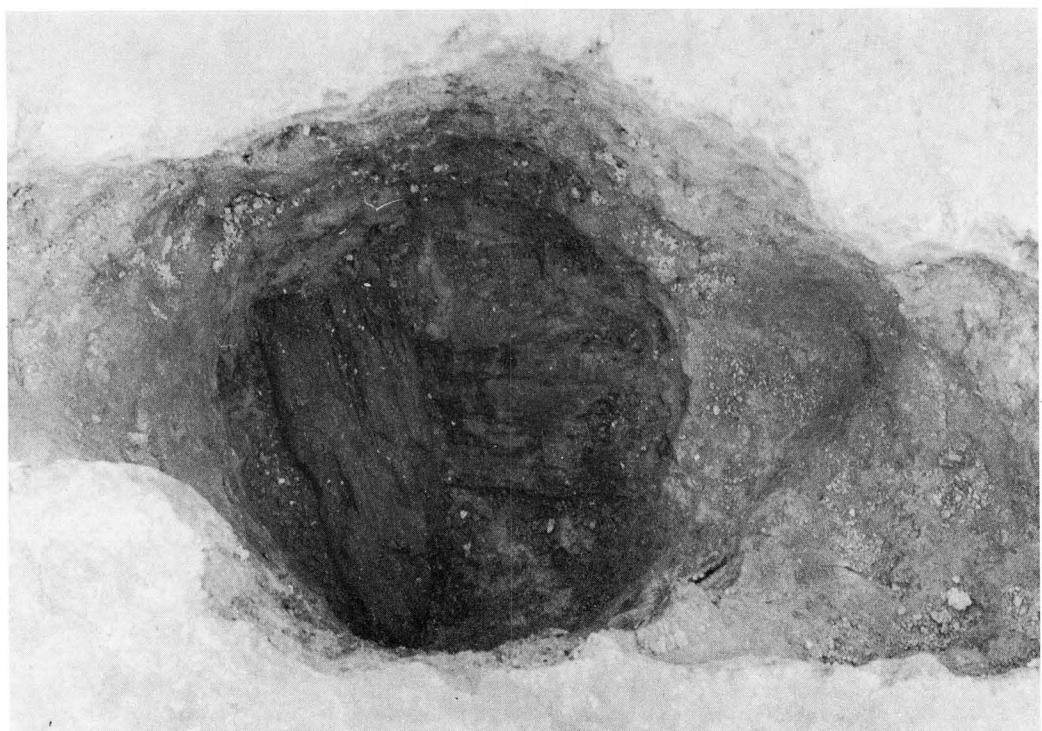
2. 1号溝・2号溝全景  
(西より)



3. 4号・5号・6号 井戸跡全景



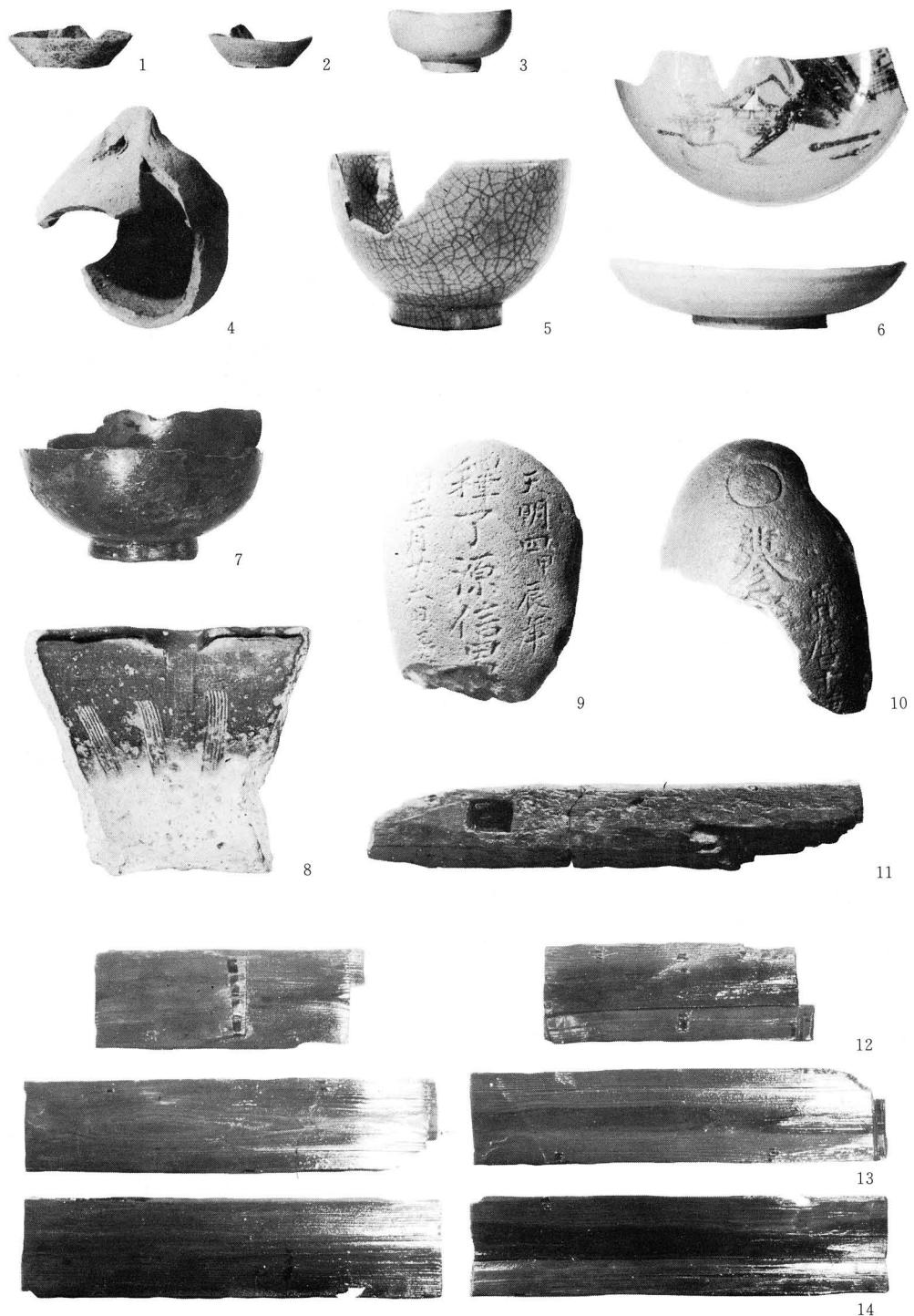
4. 7号 井戸跡全景



5 . No. 5 柱穴礎板



6 . 6号井戸跡 曲物出土状况



7. 出土遺物

## 仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物靈屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）  
第2集 仙台城（昭和42年3月）  
第3集 仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）  
第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）  
第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）  
第6集 仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）  
第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）  
第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）  
第9集 仙台市根岸町宗禪寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）  
第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）  
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）  
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）  
第13集 南小泉遺跡一範囲確認調査報告書（昭和53年3月）  
第14集 栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）  
第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）  
第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）  
第17集 北屋敷遺跡（昭和54年3月）

---

仙台市文化財調査報告書第17集

昭和53年度

### 北屋敷遺跡

昭和54年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1  
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 (株) 東北プリント

仙台市立町24-24  
TEL (63) 1166(代)

---



文化財愛護シンボルマーク